

ウトグチ A 遺跡

ウトグチ A 遺跡

福岡県春日市白水ヶ丘所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第48集

春日市文化財調査報告書 第48集

春日市教育委員会

2007

春日市教育委員会

ウトグチA遺跡

福岡県春日市白水ヶ丘所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第48集

序

春日市は、市域の面積15km²に満たない小都市ですが、アジア最大の都市福岡市に接することから、市制施行以来30数年のうちに、めまぐるしい都市化を果たしました。かつては緑の多い山野・農地がひろがっていましたが、この間の都市化にともなう宅地をはじめとした開発によって、これまでに数多くの埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。

これまでの調査の成果として、春日市は古代中国の歴史書にも記された奴国を中心地であったと考えられるのが定説となって久しいのですが、反面数多くの貴重な歴史遺産が消滅してしまったのは残念でなりません。なおも開発が進行するなかで、市内にまだ残る貴重な埋蔵文化財を残していくためには、これまでの発掘調査の成果を広く市民の皆さんに知ってもらうことは文化財保護行政の使命でもあります。

本書は春日市が昭和61年度に発掘調査を実施した、ウトグチA遺跡の発掘調査報告書であります。昭和61年度から平成3年度にかけて春日市の南西部で行われた上白水南土地区画整理事業にともなって数多くの発掘調査が行われましたが、本書はその第2冊目の報告書です。同遺跡の発掘調査では今から1600年よりも前の古墳時代前期を中心とした遺跡が確認されました。

本書が埋蔵文化財の保護に対する理解を深める資料として広く活用され、また市民の皆様をはじめとして郷土春日の歴史を学ぶ一助となれば幸いです。

終りに、発掘調査に際しましてご協力いただきました多くの方々に深潭の謝意を表します。

平成19年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

例　　言

1. 本書は昭和61年度に春日市教育委員会が発掘調査を行ったウトグチA遺跡の報告書である。
2. 遺構の実測は、丸山康晴、平田定幸、中村昇平が行い、製図は池田由紀、田中由紀、須崎葉津子が行った。
3. 遺物の実測と拓影作成は、中村が行い、製図は坂本陽子が行った。
4. 掲載写真的うち、遺構については(有)空中写真企画、丸山、中村が撮影し、遺物については坂上嘉規(スープルギャラリー)が撮影した。
5. 本書使用の2.5万分の1地形図は、国土交通省国土地理院発行の『福岡南部』である。
6. 本書の遺構実測図に用いた方位は、磁北である。
7. 本書の執筆及び編集は、中村の協力のもと丸山が行った。
8. 遺構実測図中で~~●●●~~は粘土を、■■■は赤色顔料を示している。

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の体制	3
II遺跡の位置と環境	4
III発掘調査の概要	9
IV遺構	10
1. 弥生時代の遺構	10
2. 古墳時代の遺構	13
V遺物	31
1. 弥生時代の遺物	31
2. 古墳時代の遺物	31
3. その他の遺物	32
VIまとめ	32

図 版 目 次

- 図版1 1 発掘調査前全景（北から）
2 発掘調査前全景（南東から）
- 図版2 1 調査後全景（真上から）
2 調査後全景（南から）
- 図版3 1 調査後全景（南西から）
2 1号土壤（北から）
- 図版4 1 石蓋土壤墓（西から）
2 第1号墳全景（真上から）
- 図版5 1 第1号墳主体部（南西から）
2 第1号墳主体部（北西から）
- 図版6 1 1・2号土壤墓（北西から）
2 1号土壤墓（北西から）
- 図版7 1 2号土壤墓（北西から）
2 3号土壤墓（南東から）
- 図版8 1 第2号墳主体部（南から）
2 第3号墳主体部（南西から）
- 図版9 1 第4号墳（西から）
2 第5号墳1号主体部（北から）
- 図版10 1 第6号墳主体部（南から）
2 第6号墳主体部（蓋石除去後）（南から）
3 第6号墳主体部（蓋石除去後）（東から）
- 図版11 出土遺物

表 目 次

- 表 1 上白水南土地区画整理事業地内調査一覧表…………… 1

挿 図 目 次

第1図 上白水南土地区画整理事業範囲及び調査遺跡位置図 (1/5,000)	2
第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図 旧地形復元図による遺跡位置図 (1/2,500)	6
第4図 地形測量図 (1/300)	7・8
第5図 1号土壤実測図 (1/40)	10
第6図 遺構配置図 (1/300)	11・12
第7図 石蓋土壤墓実測図 (1/30)	13
第8図 第1号墳主体部実測図 (1/30)	15・16
第9図 第1号墳周辺土層実測図 (1/60)	17・18
第10図 1号土壤墓実測図 (1/30)	19
第11図 2号土壤墓実測図 (1/30)	19
第12図 3号土壤墓実測図 (1/30)	20
第13図 第2号墳主体部実測図 (1/10)	21
第14図 第3号墳主体部実測図 (1/30)	22
第15図 第4号墳主体部実測図 (1/30)	23
第16図 第4号埴土層実測図 (1/60)	24
第17図 第5号墳1号主体部実測図 (1/30)	25
第18図 第5号墳2号主体部実測図 (1/30)	25
第19図 第5号墳3号主体部実測図 (1/30)	25
第20図 第6号墳主体部実測図 (1/30)	27・28
第21図 第6号墳周溝土層実測図 (1/30)	29
第22図 第7号墳主体部実測図 (1/30)	29
第23図 第7号埴土層実測図 (1/60)	30
第24図 1号土壤出土土器実測図 (1/4)	31
第25図 1号土壤出土石器実測図 (1/2)	31
第26図 第1号埴出土土器実測図 (1/3)	31
第27図 第1号埴出土鉄器実測図 (1/2)	31
第28図 2号土壤墓出土鉄器実測図 (1/2)	31
第29図 第5号墳1号主体部出土勾玉実測図 (1/2)	31
第30図 その他の出土遺物実測図 (1/3)	32

I はじめに

1. 調査に至る経過

ウトグチA遺跡の発掘調査は、上白水南土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、春日市が国・福岡県の補助等を受けて実施したものである。同調査地点は、福岡県春日市白水ヶ丘2丁目54番地外に所在する。

上白水南土地区画整理事業は、福岡都市計画事業として春日市上白水南土地区画整理組合によって計画施工され、計画面積は18.1haに及ぶものであった。昭和60年9月に同整理組合から春日市教育委員会教育長に対し、同事業に伴う埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出された。これを受けて調査主体者である同教育委員会社会教育課(現文化財課)では、福岡県遺跡等分布地図及び計画予定地内の現況地形等から判断して、発掘調査を必要とする範囲、期間、費用等について協議を行い、昭和61年度から順次発掘調査を実施することとなった。

番号	遺跡名	所在地	調査年月日	調査内容	備考
1	ウトグチB遺跡(1・2次)	春日市白水ヶ丘1丁目4	871106~ 880205	瓦窯跡2基、溝1 条、古墳1基	鰐尾、鬼瓦、軒瓦、 平・丸瓦多数
			880404~ 880618	弥生時代土壤5 基他	ガラス勾玉
2	ウトグチB遺跡(3次)	春日市白水ヶ丘1丁目5	900410~ 900601	溝1条、甕棺墓1 基	平・丸瓦
3	ウトグチB遺跡(4次)	春日市白水ヶ丘1丁目1-1	901011~ 901012	甕棺墓2基	
4	ウトグチC遺跡(1次)	春日市白水ヶ丘3丁目35外	880620~ 880712	中世火葬墓	
5	ウトグチC遺跡(2次)	春日市白水ヶ丘3丁目38外	890406~ 900110	古墳5基、中世 火葬墓他	鉄剣、鉄刀子、石製玉 類
6	百堂遺跡(4次)	春日市白水ヶ丘3丁目131 外	891014~ 891210	中世土壤墓1基、 集落跡他	白磁碗
7	百堂遺跡(2次)	春日市白水ヶ丘3丁目46外	880411~ 880519	縄文時代土壤、 歴史時代溝他	押型文土器
8	百堂遺跡(5次)	春日市白水ヶ丘3丁目58外	920413~ 920604	中世集落跡他	
9	百堂遺跡(6次)	春日市白水ヶ丘3丁目113 外	930601~ 930728	縄文時代集石遺構2 基、ビット多数他	押型文土器
10	百堂遺跡(3次)	春日市白水ヶ丘3丁目112 外	880511~ 880705	古墳4基他	鉄器
11	百堂遺跡(1次)	春日市白水ヶ丘2丁目80外	871008~ 871205	古墳1基、甕棺墓1 基、7世紀土壤墓他	須恵器、鉄器、玉類
12	ウトグチA遺跡(1・2次)	春日市白水ヶ丘2丁目54外	860917~ 870110	古墳7基、弥生 時代土壤	鉄刀子、土師器

表1. 上白水南土地区画整理事業地内調査一覧表



第1図 上白水南地区画整理事業範囲及び調査遺跡位置図 (1/5,000)

2. 調査の体制

発掘調査を行った昭和61年度と、報告書刊行の最終的作業を行った平成18年度の春日市教育委員会の調査体制は以下の通りである。

(昭和61年度)

総括	春日市教育委員会	教 育 長	三原 英雄
		教 育 部 長	西田 讓
		社会教育課長	諸岡 泰三
		文化財係長	大楠 泰幹
		同主任主任	増永 瞳司
		同技術主任	丸山 康晴(調査担当)
		同技術主任	平田 定幸
		同技 師	中村 昇平
		同嘱 託	草場 洋子

(平成18年度)

総括	春日市教育委員会	教 育 長	山本 直俊
		社会教育部長	鬼倉 芳丸
		文化財課長	結城 保雄
庶務		管理担当統括係長	戸渡 隆
		管理係事務主査	柚木 泰
		同事務主査	塙足 雅弘
調査		文化財担当統括係長	丸山 康晴
		同技術主査	中村 昇平
		同技術主査	吉田 佳広
		同技術主査	森井千賀子
		同技術主任	境 靖紀
		同技術主任	井上 義也(～6月)
		同嘱 託	吉田 浩之
		同嘱 託	長谷部真弓

なお、発掘調査期間中に、福岡県文化課(現文化財保護課)、筑紫地区各市町の文化財関係者諸兄のご指導、助言をいただいた。記して謝意を表したい。

II 遺跡の位置と環境

ウトグチA遺跡は、福岡県春日市白水ヶ丘2丁目54番地外に所在する。福岡平野南奥部に位置する春日丘陵の南西部にあり、那珂川とその支流の梶原川を西方に望む小丘陵尾根部に立地している。牛頭山麓から派生し、開析作用によって形成されたウトグチA遺跡周辺の各小丘陵地帯は、八手状に小丘陵と小谷が発達しているが、中位段丘上で概ね西向きに突出することから眺望性に富み各種、各時代の遺跡が多く分布する。

弥生時代の遺跡は、同遺跡の北方に位置する春日丘陵北半部に存在する須玖遺跡群を中心に華々しく展開する。同遺跡周辺のこれまでの発掘調査成果によると小丘陵前面の段丘面上に弥生時代中期前半以降に集落及び墓地が密に展開する。集落では天神の木遺跡、中白水遺跡、墓地では門田遺跡、原遺跡などである。いっぽう小丘陵部では同時代の遺跡は規模も小さく点在する傾向にある。ウトグチB・C遺跡、百堂遺跡などで土壇、甕棺墓などが少數確認されている。

古墳時代の遺跡は、那珂川・梶原川中流域を東岸から見下ろすという好適な環境下に数多くの集落、古墳が分布する。同流域の発生期から前期の墳墓は、前方後円墳は安徳大塚、低墳丘墓は炭焼古墳群、カクチガ浦古墳群、ウトグチ古墳群などが分布する。またこれらの母体となる集落としては、門田、辻畑遺跡などが市内で確認されている。ウトグチ古墳群は、今回報告するウトグチA遺跡の存在する小丘陵尾根上の7基のほかに、同丘陵の北方に位置する二つの小丘陵にそれぞれ所在するウトグチB遺跡の1基、同C遺跡の5基の支群の総称である。A～Cとも造墓の時期が若干異なるが低墳丘の方墳、円墳で構成されている。なお、同時期の前方後円墳としては市内北端部で御陵古墳の存在が知られるが、主体部等が確認されていないので実体に不明な点もある。中～後期については、那珂川・梶原川東岸流域については、赤井手古墳、日拝塚古墳、下白水大塚古墳などの比較的大型の円墳、前方後円墳が分布する。集落については今のところ市内では良好な資料に恵まれていないが、赤井手遺跡、竹ヶ本遺跡が分布する。6世紀中葉を過ぎると、ウトグチ遺跡より東方の牛頭川流域及び周辺部で九州最大規模の須恵器生産窯である牛頭窯跡群の分布が顕著であるが、市内の発掘調査では6世紀後半から7世紀初頭の窯跡は今までに4基が確認されている。さらにウトグチ遺跡周辺で特記すべきは、6世紀後半以降に南方の觀音山山麓を中心に展開する觀音山古墳群の存在である。那珂川町を主体に一部春日市に展開する後期群集墳であるが、市内ではこれまでに西浦古墳群、イケ谷古墳群、白水池古墳群が觀音山古墳群の支群として調査、確認されている。

古墳時代以降についても重要な遺跡の分布から、ウトグチ遺跡周辺は要衝に位置していたことが窺える。ウトグチB遺跡の所在する小丘陵西側斜面にはウトグチ1・2号窯跡が調査され、蘇我系造瓦技術の影響下に生産された瓦専用窯が確認されており、近接地のおそらく中白水遺跡の一角に白水庵寺が想定されているが、これまでの調査では古代寺院の実体はまだつかめていない。また、ほぼ同時期に西海道の中核機関である大宰府防衛のために築造された天神山水城跡が存在する。現状では、那津側の防衛線の西端部として位置づけられている。



- 1 翠丘遺跡群 2 赤井古墳 3 竹ヶ本古墳 4 弥永原遺跡群 5 卵内尺古墳群 6 老司古墳 7 老司瓦窯跡群
 8 老松神社古墳群 9 賢秀郷A遺跡 10 下白水大塚古墳 11 賢秀郷B遺跡 12 野口遺跡群 13 中尾古墳
 14 浦の田4号墳 15 眼音堂古墳群 16 石尺遺跡 17 日拝塚古墳 18 寺田・長崎遺跡 19 柏田遺跡 20 辻畠遺跡
 21 中白水遺跡 22 門田遺跡(門田古墳群) 23 今光・地余遺跡 24 城ノ越遺跡群 25 小丸古墳群 26 井河古墳群
 27 大土居水城跡 28 天神山古墳群・水城跡 29 中原・ヒナタ遺跡群 30 宗石遺跡群(貝徳寺古墳) 31 天神ノ木遺跡
 32 下原遺跡 33 恵子若山遺跡群 34 松木遺跡群 35 整理池遺跡 36 ウトグチB遺跡 37 百堂遺跡
 38 ウトグチC遺跡 39 原遺跡(原古墳群) 40 中原塔ノ元遺跡 41 ウトグチA遺跡 42 白水池古墳群
 43 妙法寺古墳群 44 油田古墳群 45 観音山古墳群 46 カクチガ浦遺跡群(エグ古墳) 47 大万寺前古墳
 48 イボリ古墳 49 西浦古墳群 50 イケ谷古墳群 51 球燒古墳群 52 裕田溝 53 後田遺跡群 54 安徳遺跡群
 55 安徳大塚古墳 56 安徳台遺跡群

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 旧地形復元図による遺跡位置図 (1/2,500)

第4図 地形測量図 (1/300)

III 発掘調査の概要

ウトグチA遺跡は、最高所の標高が56m前後の小丘陵の尾根部分に立地する。福岡平野最奥部の牛頭山系から派生する春日丘陵の南西部に位置する一小丘陵に遺跡は分布する。

発掘調査前の同遺跡は、「福岡県遺跡等分布地図」(1980年刊行)によると、1975年の福岡県教育委員会による分布調査を踏まえ、同小丘陵に東側から「ウト口第1号墳」(前方後方墳)、「ウト口第2号墳」(円墳)が存在し、このほかに低墳丘墓が数基あることが記されている。

現在、春日市教育委員会が発行する「春日市遺跡地図」(2004~)では、上白水南土地区画整理事業計画にともなう隣接する小丘陵上での調査順に南からウトグチA、同C、同B遺跡と呼称している。

発掘調査は、昭和61(1986)年9月17日から着手し、明くる昭和62(1987)年3月31日まで行われた。前述の通り、前方後方墳を含めた前期古墳の存在が予測できたので、バックホウ投入による尾根上の表土剥ぎよりも前に、現況での地形測量をまず開始し、この図面をもとに尾根上を中心に土層観察用のベルトを設定し、発掘作業員による慎重な表土剥ぎ作業とバックホウによる表土剥ぎ作業を併用しながら、古墳等の遺構検出に努めた。併せて、同丘陵裾部に須恵器窯跡等の存在の有無を確かめるためにバックホウを用いて確認調査を行った。

調査の結果、尾根上からは円墳1基、方墳6基のほか、土壙墓3基、石蓋土壙墓1基、土壙1基などが確認された。古墳については、最高所に位置する1号墳が円墳のほかは、方墳であった。調査前に前方後方墳としていたものは結果的に1号墳及び東側に接する2号墳であった。2~7号墳はいわゆる低墳丘墓で尾根切断状の直線的な周溝を要所に設けていた。内部主体として木棺が推定される土壙墓3基は、すべて1号墳の裾部にとりつくものであった。土壙は、今回の調査で唯一弥生時代の遺構で、中期前半以降のものである。ウトグチ一帯の小丘陵上で点在的に分布する同時期の遺構の性格を示しているものであろう。

IV 遺構

1. 弥生時代の遺構

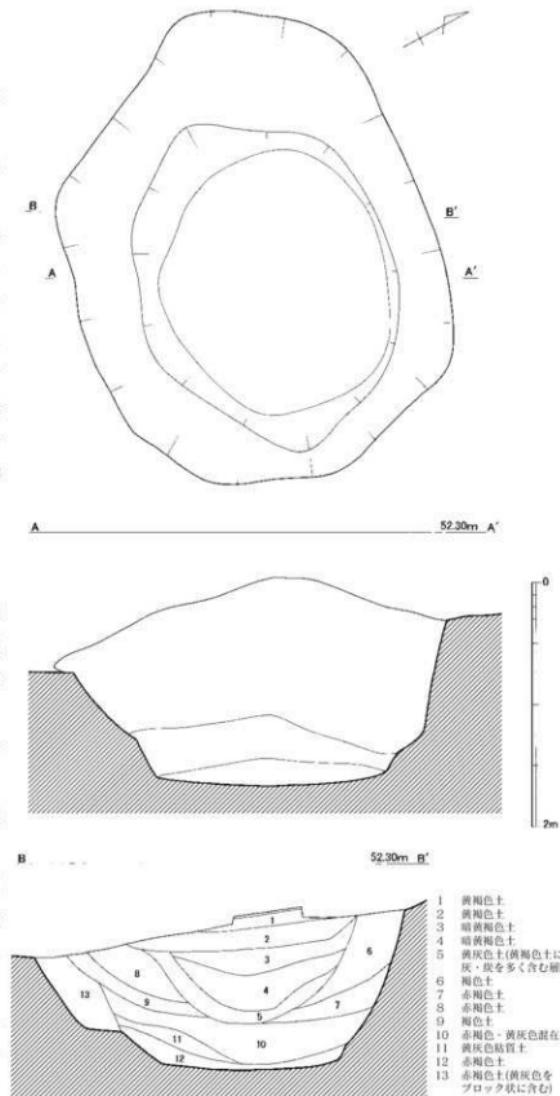
1号土壙(図版3、第5・6図)

調査範囲である尾根部の最も東側で検出した。第7号墳墳丘東辺に切られてい。平面プランは楕円形を呈し、遺構面の径1.5~1.9m、深さ1.8mを測る。墳底から高さ0.4m前後で2段掘り状になる。墳底径は0.9~1.07mの楕円形である。下層から弥生土器が出土した。

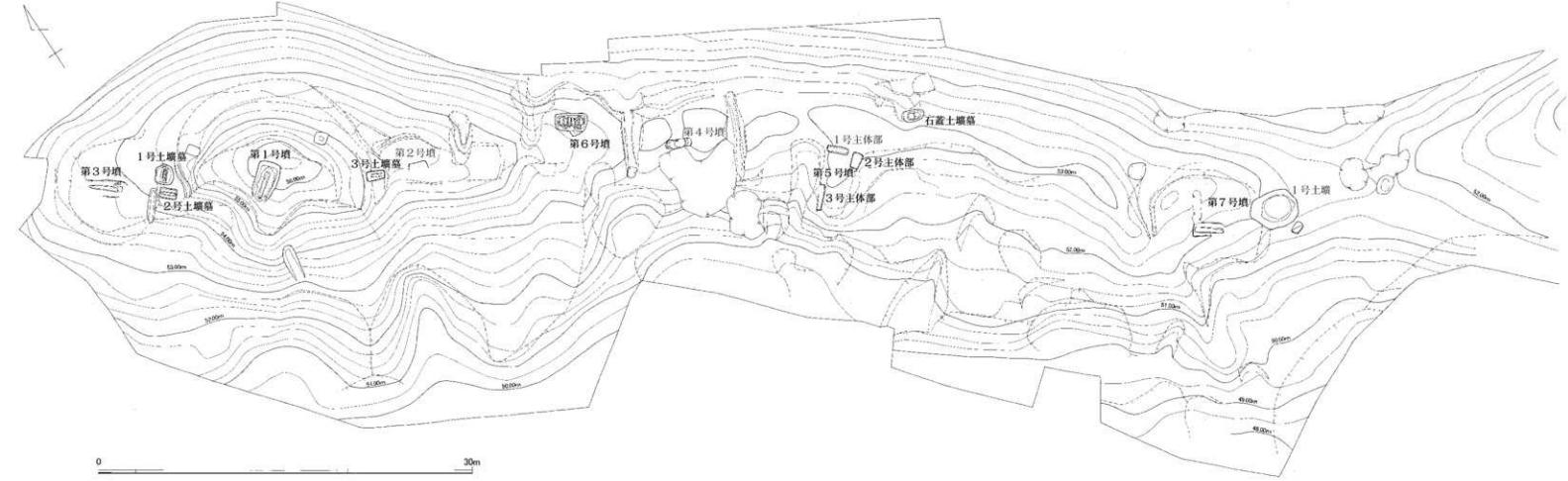
石蓋土壙墓(図版4、第6・7図)

略東西方向に細長い調査区のはば中央付近で、尾根上からわずかに外れた北側斜面で単独で確認された。

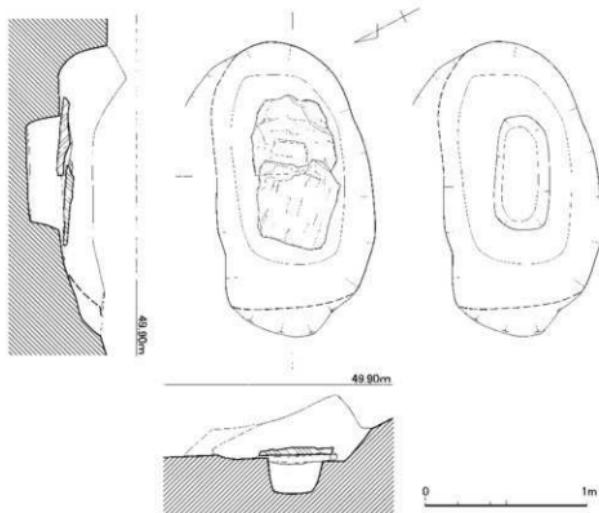
上面プランは整った長楕円形で、長さ1.63m以上、幅0.97mを測る。墓壙掘り方は2段掘りである。2段目に扁平な蓋石2枚が用いられていた。頭位側の蓋石が足位側の石蓋の1辺に覆い被さるように置かれている。蓋石周囲に粘土等の目張りの痕跡は観察されなかつた。



第5図 1号土壙実測図 (1/40)



第6図 遺構配置図 (1/300)



第7図 石蓋土壙墓実測図 (1/30)

墓壇の主軸はN-63°-Wにとる。床面は、長さ0.7m、幅3.4m、深さ0.2mを測り、おおよそ隅丸長方形である。床面はほぼフラットで、頭位と考えられる西側がわずかに高い。

土器等の遺物は出土しなかった。

2. 古墳時代の遺構

第1号墳(図版4・5、第5・8・9図)

調査区中の尾根部最高所の標高56m前後に位置する。同遺跡がのる小丘陵は北西方に細長く直線的に見下ろす平野部方向に突出するが、そのほぼ端部に選地し造墓されている。尾根上の最高所でここだけが小山状にさらに突出していることから調査前から墳墓であることは明瞭であった。

墳丘

現況では尾根南側斜面の開析による土砂の崩落が顕著であり、主体部南辺の一部も含めて南側の墳裾が大きく変形している。尾根部北側斜面の残りの良さから墳裾北側半分は容易に推定できる。また墳裾の東西側に墳丘上部の主体部とは別に土壙墓3基が営まれていること、さらに東西両側とも裾部外側に一部周溝状に溝が切られていることなどから、直径16m程の円墳と推定される。推定される墳裾前後と墳丘上の等高線の比高差から、墳丘の高さは少なくとも2m以上と推定される。

墳丘の造作については、発掘前の現況地形測量にあわせて設置した尾根上及びそれとほぼ直交方向の第1号墳上の土層観察ベルトからは、墳丘上に明らかな盛土は観察できなかつたが、墳頂部墓壙掘

り方周囲の土層断ち割り調査では、少なくとも厚さ80cm程の盛土層がみられる。墳裾はかは地山整形によって墳形を造り出したと推定される。西側周溝は、隣接する第3号墳との間の墳裾の一部に尾根切削状の周溝が一部確認できる。長さ3m、幅0.5mの弧状の小溝で、深さ0.5mを測る。東側周溝は、墳裾南東側から北東側にかけて長さ10m程、幅2mの間に掘削されている。このうち、尾根上部分はほぼ直線的に尾根を切る。深さは0.2~0.3m程である。この周溝は第2号墳と共有する状態とする。

墳丘東側周溝内から古式土師器が出土した。

主体部

墳丘頂部の平坦面のはば中央に位置する。墳丘南側半分ほどが土砂流出のために大きく変形しているために墓壇の掘り方のうち、1段目南西側辺の壁立ち上がりは失われている。

墓壇主体部は主軸をN-53°-Eにとる粘土層削竹形木棺である。掘り方上面プランは整った隅丸長方形で、長さ3.3m以上、幅1.9mを測る。現況の墳頂から深さ約0.4mまでは盛土層で、そこから墓壇を掘り込んでいる。1段目床面は地山層で、2段目はこの床面中央に棺床として、深さ約10~17cmと浅く掘り込まれている。横断面は浅い円弧状をなす。棺周囲を被覆した青灰色粘土の残存状態は良好で、両小口の立ち上がりはほぼ垂直で頭位側と推定される北東側の粘土の厚みは30cm以上になる。掘り方内部の各土層観察から、棺長は2.3m、幅0.4~0.45mと推定される。

棺内から鉄製刀子1点が出土した。

1号土壇墓(図版6、第6・10図)

第1号墳西側裾部と第3号墳との間の緩斜面にあり、第1号墳の周溝外側の接する位置にある。すぐ南に近接して2号土壇墓が営まれている。後述する2・3号土壇墓とともに第1号墳墳裾に取り付くように造営されているので、ここで述べる。

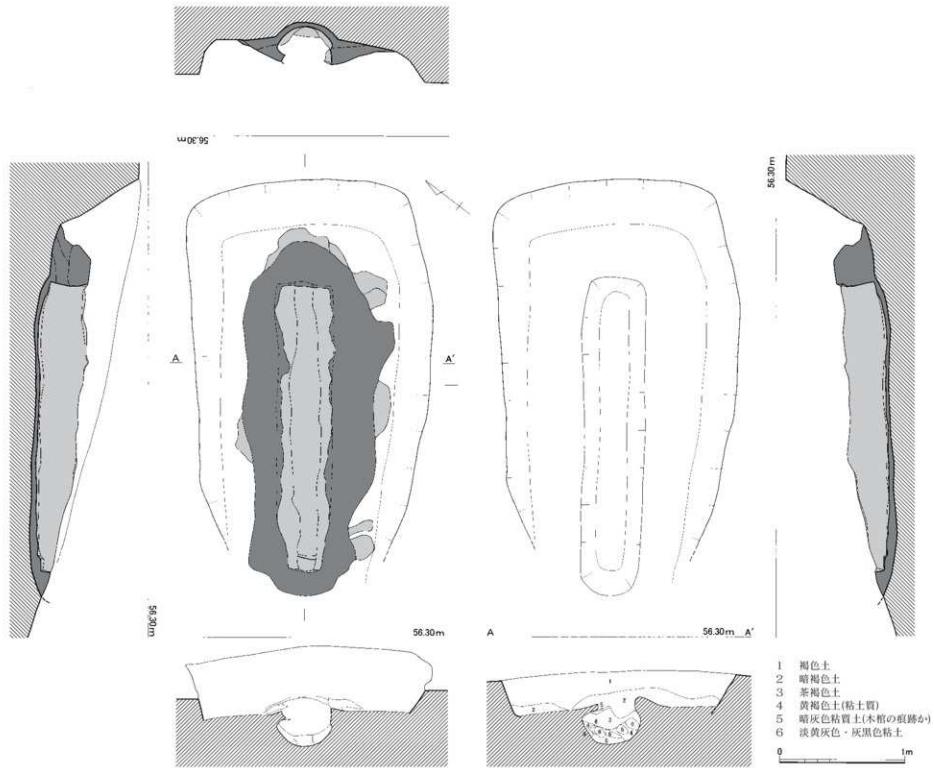
墓壇の主軸方向は、N-31°-Eにとる。墓壇は西辺が掘削されているのでやや変形しているが、平面プランは略円形で、掘り込みは2段になっている。上面で長さ1.68m、幅1.56mを測る。1段目掘り方の北辺の一部にステップ状の掘り込みが附帯する。2段目は整った平面プランで隅丸長方形を呈する。壇底の長辺両側にさらに細長く掘り込みを有するので、木棺の使用が推定される。長さ1.29m、幅0.49m、深さ0.35mを測る。

遺物は出土しなかった。

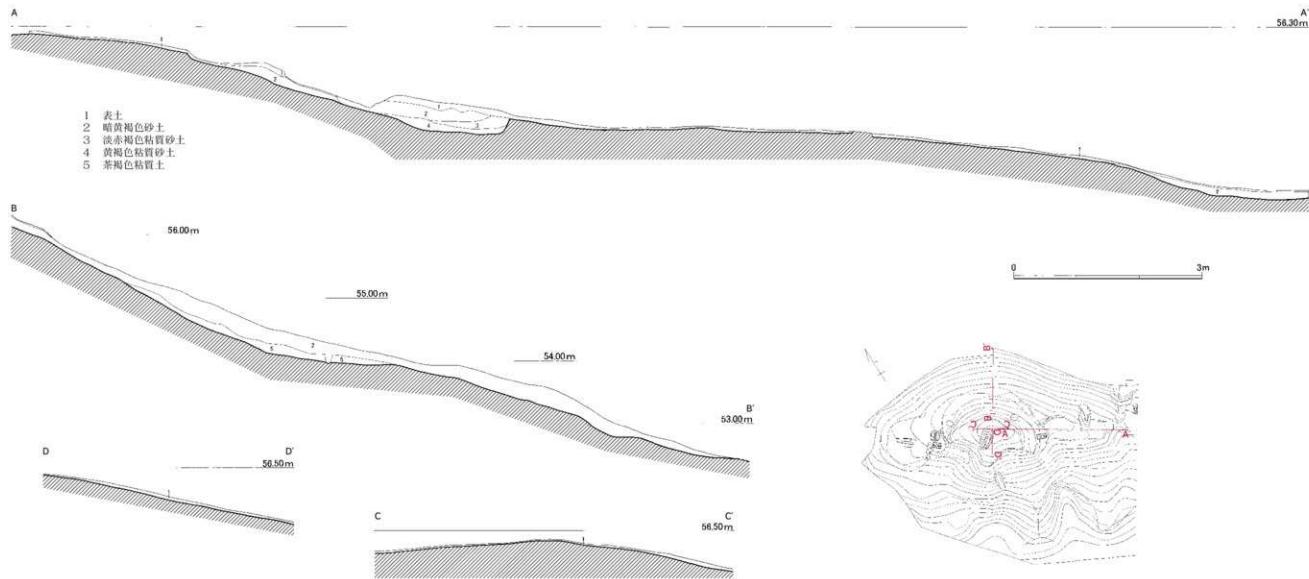
2号土壇墓(図版6・7、第6・11図)

1号土壇墓の南辺に近接して造墓されている。

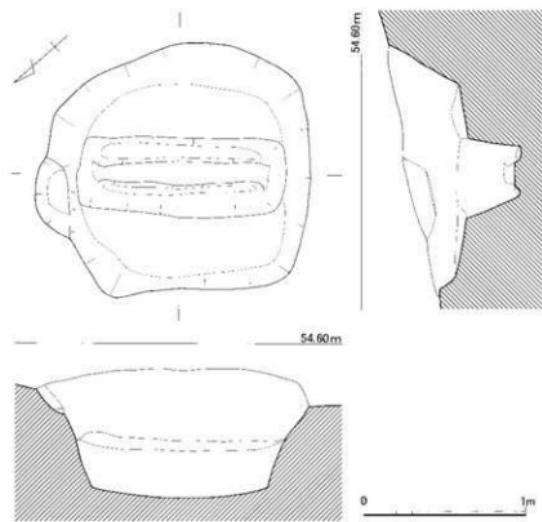
墓壇掘り方主軸の方向はS-65°-Eである。掘り方上面のプランは整った隅丸長方形で、長さ1.43m、幅0.89m、深さ0.85mで2段目の掘り込みに達する。平面プランはやや細みの隅丸長方形で、長さ1.15m、幅0.26m、深さ0.36mを測る。壇底床面はほぼ平坦であるが、頭位側と考えられ



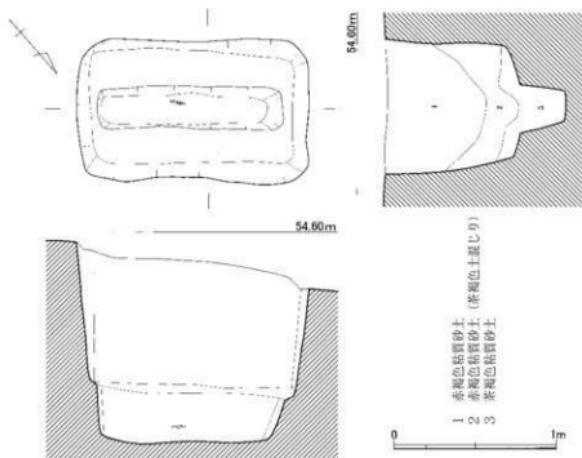
第8図 第1号墳主体部実測図 (1/30)



第9図 第1号填周辺土層実測図 (1/60)



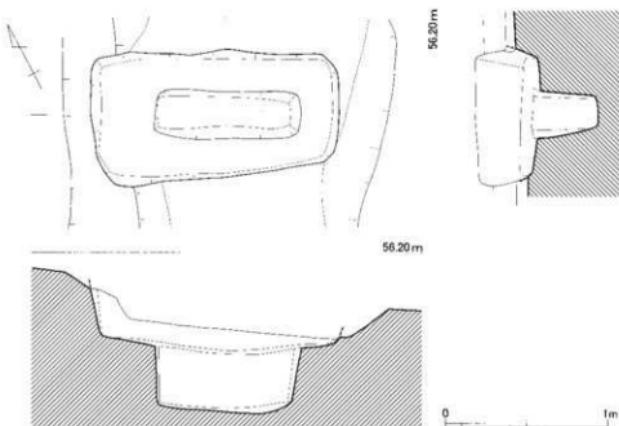
第10図 1号土塙墓実測図 (1/30)



第11図 2号土塙墓実測図 (1/30)

る南側がやや上がる。

出土遺物として、墓壇2段目ほぼ中央部の床面から10cm程上で鉄製刀子1点が出土した。



第12図 3号土壙墓実測図 (1/30)

3号土壙墓(図版7、第6・12図)

第1号墳東側埴裾の周溝中に造墓されていた。1・2号土壙墓とは第1号墳埴丘を介して正反対に位置する。

墓壙主軸はN-64°-Wの方位をとる。掘り方上面プランは隅丸長方形で、長さ1.53m、0.83mを測る。深さ0.35mで、整然とした長さ0.9m、幅0.3mを測る隅丸長方形プランの掘り方2段目に達する。深さ0.4mで床面に達する。

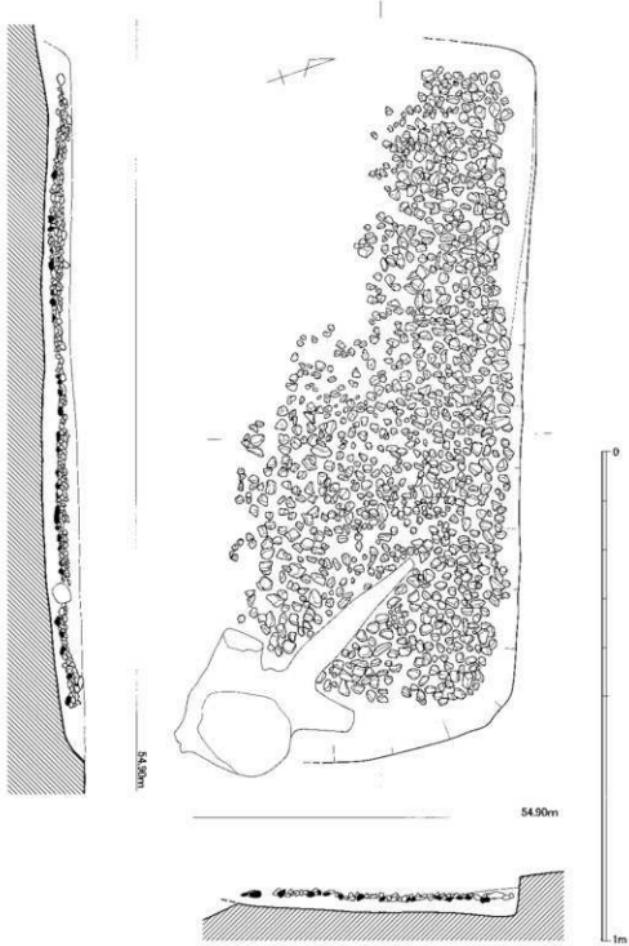
出土遺物はまったくなかった。

第2号墳(図版8、第6・13図)

第1号墳と東側で接し、標高54.75m前後の尾根上に位置する。発掘調査前には前方後方墳の後方部と推測していたが、西隣の第1号墳との境に周溝を有することから、独立した埴丘と判断した。

埴丘

第1号墳埴裾との間は幅2m程、深さ0.2~0.3mの尾根切断状の直線的な溝を切る。第2号墳とは周溝を共有する状態をとる。また、この溝の北端付近から東方に幅0.8m程の溝が約2m延びている。埴丘の東側は同じく幅1.7m、深さ0.8m程の直線的な溝を入れているが、埴丘北東側のみに設けられ、尾根を完全に貫通するまでになっていない。主体部の残り具合を含めて全体的に埴丘が流失していること、とくに埴墓の南側半分は大きく流失しているが、各溝の形状、規模等から、地山削り出しによって整形された1辺7m程の方墳と推定される。



第13図 第2号墳主体部実測図（1/10）

主体部

平坦な墳丘頂部のほぼ中央部に位置する。墳丘の南側半分ほどがとくに大きく流失しているために、墓壙自体もかなり残り具合が悪く、掘り方南辺の壁の立ち上がりがまったく残っていなかった。わずかに掘り方の北東側及び北西側の隅角部分が残り、壁の立ち上がりも壙底から高さ5cm程で、墓壙

床面付近が辛うじて残るような状態であった。床面には砾床が敷かれていた。径1~4cmの大玉砂利状の小砾で、その表面にわずかに赤色顔料の使用が認められた。

現況での掘り方規模は、長さ1.48m、幅0.6m以上である。平面プラン隅丸長方形の推定される主軸方向は、N-70.5°-Wである。

土器等の出土遺物はなかった。

第3号墳(図版8、第6・14図)

調査区中、最も西側で確認され、北西方向に突出する尾根高所部分の先端部に位置する。標高54mの尾根平坦部にあり、第1号墳の西隣にあるが、現状では第1号墳墳頂部との比高差は約2mある。

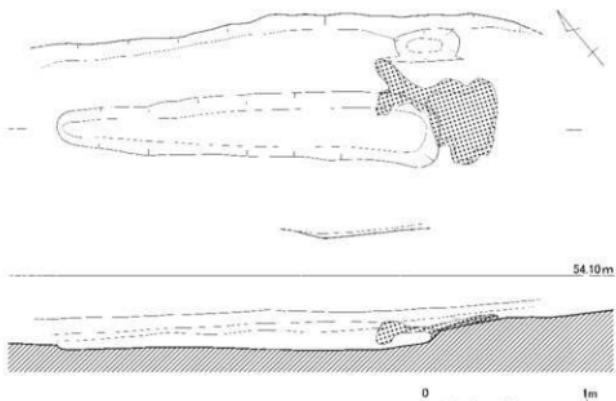
墳丘

墳頂部から墳丘西側にかけて大きく土砂が流失している。小丘陵尾根部の先端部であり調査区外の北西方向は地形的にも落差が大きく、墳丘北西側に周溝等の明確な造作は確認されなかつた。東側には尾根横断方向の途中まで直線的に周溝を切っている。長さ2.8m、幅0.6m、深さ1mを測る。

周溝と墳丘周囲の等高線等から判断して、1辺約8mの方墳とした。顯著な盛土を有さない、地山整形による築造と推定される。

主体部

尾根部西側の土砂流失で墓壙掘り方もかなり失われている。推定される掘り方上面プランは隅丸長方形と考えられるが、北東側及び南西側の長辺の一部と短辺側の壁の立ち上がりはまったく残っていない。残存する1段目掘り方規模は長さ3m以上、幅1.38m以上である。2段目掘り方は、細長い長円形で、長さ2.35m、幅0.42m、深さ0.1mを測る。主軸方向はN-40.5°-Wをとる。木棺を据



第14図 第3号墳主体部実測図 (1/30)

える棺床として、掘り方1段目床面中央に浅く地山中に掘りくぼめている。短辺付近の一部に粘土が残存していた。

土器等の出土遺物はなかった。

第4号墳(図版9、第6・15・16図)

調査区のはば中央部にあり、尾根上の平坦部で標高53mに位置する。墳丘が立地する尾根上から南側斜面部分にかけて後世の擾乱によって土砂が土壤状に大きくとられている。

墳丘

略東西方向に走る尾根上の2ヶ所に、尾根切断状の周溝を切っている。西側の周溝は、幅1.7m、長さ5m、深さ1mを測る。西側で隣接する第6号墳の周溝として共有する。東側の周溝は、幅1.6m、長さ7.3m、深さ0.5mを測る。また、尾根北側の斜面は若干の造作によって墳丘の北辺側の段差を造り出している。尾根上の土層観察ベルト、周溝の掘削状況等から判断して、尾根上の地山整形による1辺10m程の方墳とみなされる。

主体部

墓壙中央部に1m×0.7mの床面に達する楕円形の掘り込みがあるほか、木の根等による擾乱が著しい。主軸方向は、N-68°-Wをとる。掘り方上面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長さ2.15m、幅0.75mを測る。深さ0.17~0.35mで床面に達するが、長さ1.55m、幅0.4m前後の整った長方形である。西側床面付近は平坦で、小口側に向かって緩やかに上がる。床面から15cm程の高さで長さ10cm程の扁平な小砾とともに、淡青灰色の粘土および赤色顔料が薄く広がる。

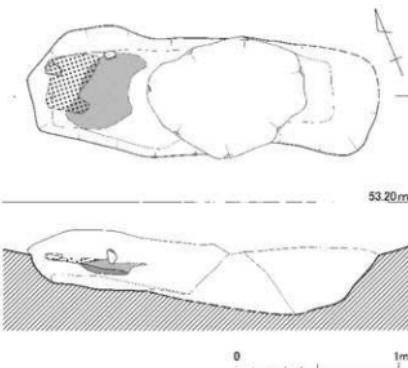
土器等の出土遺物はなかった。

第5号墳(図版9、第6・17~19図)

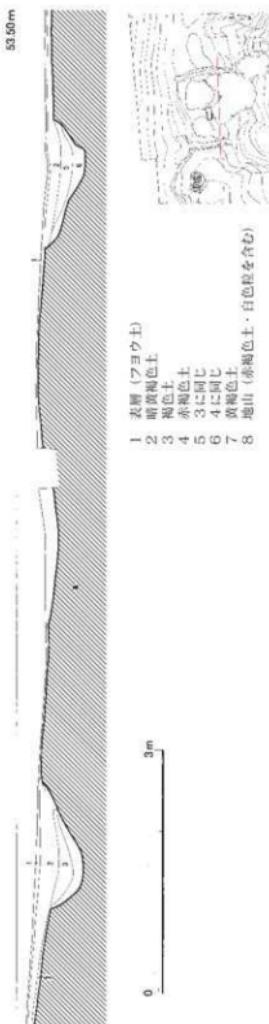
第4号墳南東側10m程にあり、標高53m前後に位置する。第4号墳から東側に続く尾根はいったん第5号墳付近で尾根の幅が広まり尾根上全体が平坦になるが、尾根南側斜面にかけて幅にして2m以上の溝状の掘り込みが谷部に向かってあることなどから、古墳築造時とは周囲の地形がかなり変容しているものと考えられる。

墳丘

尾根上で残した土層観察ベルトからは、顯著な盛土層は確認されなかつたので、地山整形によつて



第15図 第4号墳主体部実測図(1/30)



第16図 第4号墳土層実測図 (1/60)

墳丘を造り出したと推定される。発掘調査による尾根部での掘り下げる過程で、近接する長方形の墓壙掘り方プラン3基を確認したので、一応同一墳丘上に1～3号の主体部があるものと想定した。前述した周囲での地形の大きな変容もあって、墳丘の形状及び規模の検出は困難を極めた。尾根南西側斜面の溝状の掘り込みは、その一部が尾根切断状に設けた周溝とみなし、溝上端の延長がコーナー状に屈曲すること、また尾根北東側斜面にかけての精査でわずかなコーナー状の屈曲する箇所に上端としての落ちが確認できることから、略南北方向にやや長い方形の墳丘を想定した。規模は南北方向12m、東西方向8m程度であろうか。

1号主体部

想定する墳丘のやや北に寄った箇所にあり、主軸方向はN-46°-Wをとる。墓壙掘り方プランは隅丸長方形で、長さ1.77m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。

墓壙床面からわずかに浮いた状態で石製勾玉1点が出土した。

2号主体部

1号主体部のすぐ東隣に主軸方向をほぼ直交する位置関係で墓壙掘り方が確認された。小口側の1辺がやや台形状に広がるが、整った隅丸長方形のプランを呈する。長さ1.3m、幅0.85m、深さ0.2mを測る。主軸方向はN-56.5°-Eである。

出土遺物はなかった。

3号主体部

想定する墳丘中心部南西側の溝状の掘り込みによつて主体部西側半分程が大きく失われている。墓壙掘り方プランは、隅丸長方形で長さ2.09m、幅0.5m以上、深さ0.24mを測る。墓壙床面は全体的に平坦であるが、北側小口と南側小口との間で比高差30cm程度の傾斜がつく。主軸方向はN-40°-Eをとる。

出土遺物はなかった。

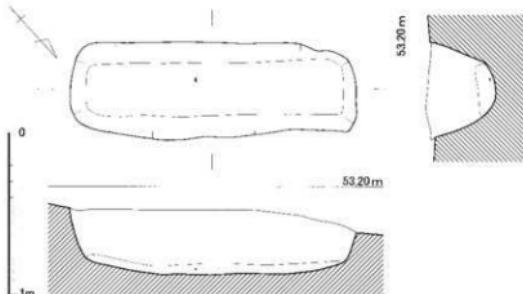
第6号墳(図版10、第
6・20・21図)

第4号墳の西隣にあり、標高53.5m前後の尾根上に位置する。地形測量後のバックホウによる表土剥ぎの段階で、表土を除去すると間もなく蓋石の並びが一部露出したので、人力による掘り下げを行った。これより西側の尾根上

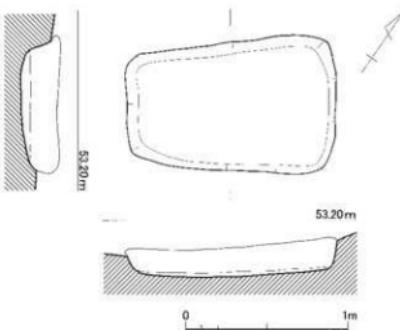
の起伏に対して平坦な尾根だったので、墳丘の確認に手間取った。

墳丘

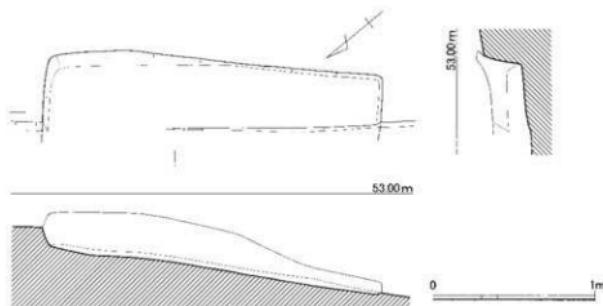
尾根の東側及び西側で尾根切断状の周溝を検出した。東側周溝は、尾根上直交方向に完全に横断掘削されている。長さ5m、幅1~1.6m、深さ0.4mを測る。西側周溝も尾根上を直交方向に切られているが、尾根南側は完全に横断せずに消滅している。長さ3.5m、幅1.5m前後、深さ0.3m前後を測る。尾根から両側斜面にかけては、部分的に直線的な段差が認められるので墳裾については地山整形をしたと推定される。また、墓壙掘り方周囲の土層観察では、少なくとも厚さ15cm程の盛土層が確認できた。若干の盛土整形はあるが、おもに地山削り出



第17図 第5号墳1号主体部実測図 (1/30)



第18図 第5号墳2号主体部実測図 (1/30)



第19図 第5号墳3号主体部実測図 (1/30)

しによる墳丘の築造が推定される。墳丘規模は、周溝間の距離、南北側の段差間の距離から、1辺7m前後の方墳と推定される。

主体部

主体部は、主軸方向をN-55°-Wにとる石棺系竪穴式小石室である。盛土中から掘り込まれた石室掘り方は隅丸長方形プランで、長さ2.6m、幅1.45m、深さ1.4m前後を測る。石室内法は、長さ1.68m、南東側小口幅0.4m、北西側小口幅0.43m、高さ0.57mである。石室の構築は、掘り方床面は石室床面が掘り方底面より約5cm程高くなるように平坦に造作している。両側壁の石材は、腰石及び2段目はおもに長さ40~50cm前後、高さ30cm前後の方柱状の石塊を使用している。さらにその上に厚さ10cm前後の比較的扁平な石塊を3段目ないし4段目として積み上げている。これに対し両小口は、腰石に厚さ10~15cm前後の扁平な石を立てて据え、その上は小ぶりな石塊を2段目ないし3段目として積み上げている。蓋石は長さ60~75cm前後、厚さ15~20cm前後の石塊6枚を両側壁間上端に横渡し、さらに6枚間の隙間を埋めるように小ぶりの石塊を置いている。

第7号墳(第6・22・23図)

尾根上に並列する古墳群の最も東側にあり、墳丘部は標高52.75mを測る。古墳群が営まれる略東西方向に長い尾根は、第7号墳の東側でいったん鞍部になる。尾根南側の斜面にかけて土砂が流出しているため古墳の南半分側は残りが悪い。墳丘東側は弥生時代の1号土壙を切っている。

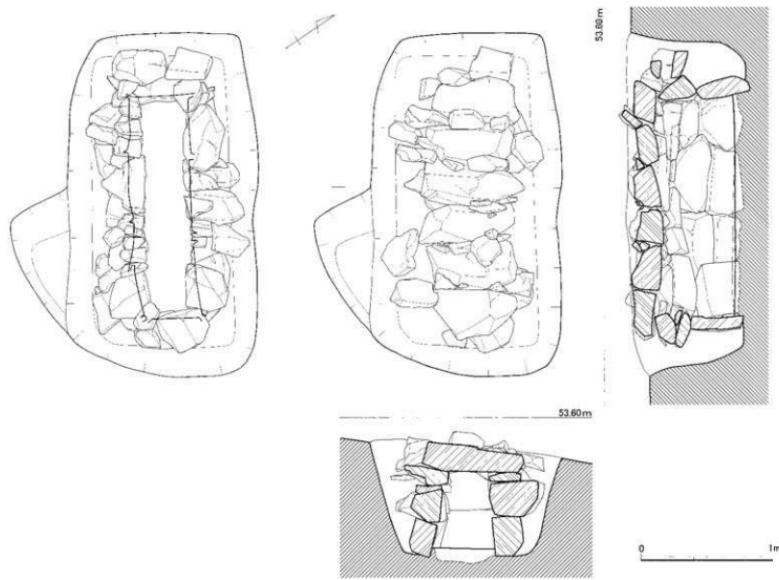
墳丘

墳丘西辺側に背後の尾根の高まりを尾根切断状にやや角張った弧状の周溝を切り出している。幅0.8~2m、深さ0.3mを測る。北辺から東辺にかけては、尾根の斜面から鞍部に向かって地形が下がることから、それぞれほぼ直線的に段状に削り出し墳丘を整形していると考えられる。南辺側は大きく土砂が流失しているので墳丘の形状は留めていなかった。現況から1辺9.5m程の方墳と推定される。

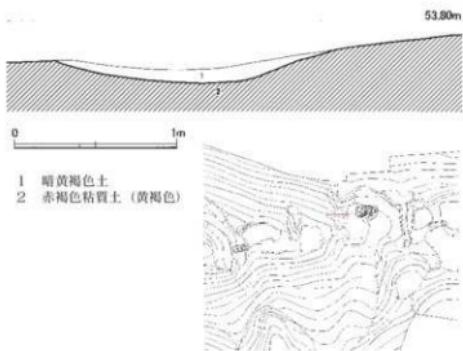
主体部

墳丘全体の残り具合が悪いことと、部分的に後世の擾乱坑があることから、墓壙掘り方の残り具合もよくない。掘り方上面プランは隅丸長方形で、長さ2.5m以上、幅1.1mを測る。深さ0.1mで2段目に達するが、長さ2.35m、幅0.47m、深さ0.25mの棺床を掘り込んでいる。部分的に上端外側に帶状に粘土が残っていた。また南側小口寄りの部分の床面に赤色顔料の散布が観察された。墓壙の主軸方向は、N-56°-Wをとる。

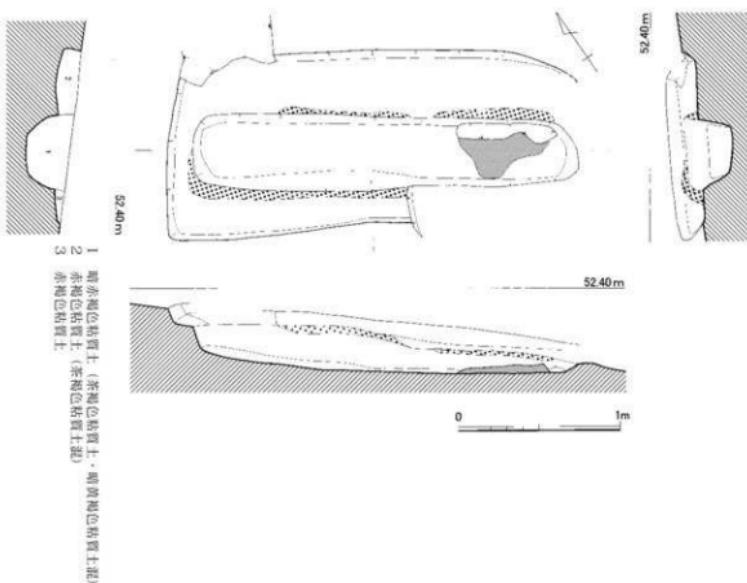
出土遺物はまったくなかった。



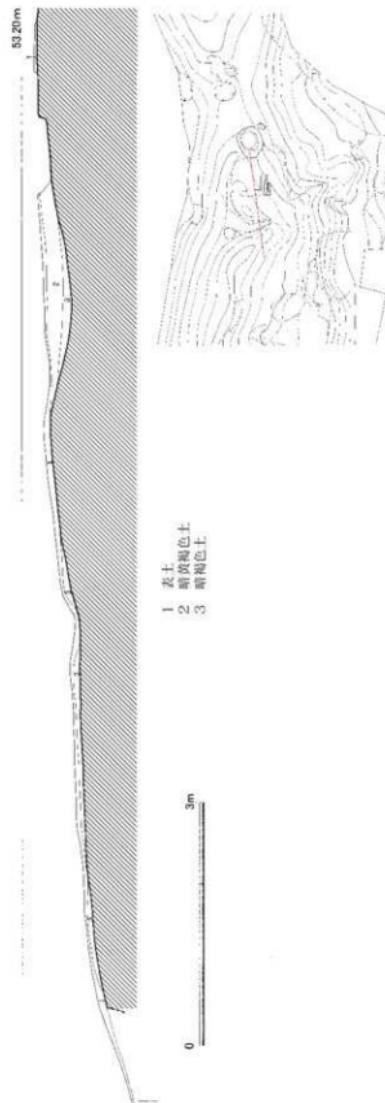
第20図 第6号墳主体部実測図 (1/30)



第21図 第6号墳周溝土層実測図 (1/30)



第22図 第7号墳主体部実測図 (1/30)



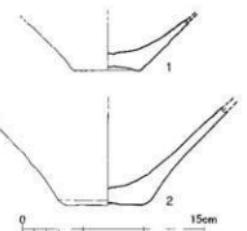
第23图 第7号填土层实测图 (1/60)

V 遺 物

1. 弥生時代の遺物

弥生土器(図版11、第24図)

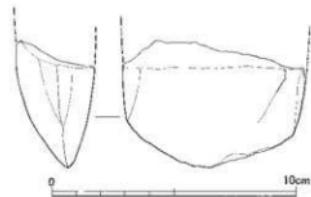
1・2とも1号土壙出土の弥生土器底部の破片資料である。壺形土器の底部と思われる。いずれも外底部はわずかに上げ底状になる。1は、外面に丁寧なナデが施されている。焼成は良好で、灰褐色を呈する。2は、器表面が風化して内外とも調整手法は不明である。焼成は普通で、一部に黒斑が観察される。赤褐色を呈する。1号土壙は図示していないが、この他にM字突帯をめぐらす壺形土器の胸部破片が多数出土している。



第24図 1号土壙出土土器実測図 (1/4)

石製品(図版11、第25図)

玄武岩製のいわゆる大型蛤刃磨製石斧である。刃部の破片資料で、1号土壙から出土した。刃部の一部が僅かに折損しているが、刃は鋭利である。淡灰色を呈する。



第25図 1号土壙出土石器実測図 (1/2)

2. 古墳時代の遺物(図版11、第26~29図)

土師器(図版11、第26図)

古式土師器小型丸底壺の約1/3の破片資料で、第1号墳周溝から出土した。復元口径は10.6cmになる。体部は丸みを帯び、頸部から口縁部はやや外方に開く。体部内面の調整は横方向のヘラケズリを施す。その他は表面が若干風化しているが、概ねナデ調整である。



第26図 第1号墳出土
土器実測図 (1/3)

鉄製品(図版11、第27・28図)

第27図は、第1号墳主体部から出土した。長さ約3cmの破片資料。鋒をわずかに欠く。峰側はほぼ直線的である。第28図は2号土壙墓から出土した。身の長さは5.7cmを測る。刃側、皆側とも関部の段を有するものと思われる。柄部に木質が残る。



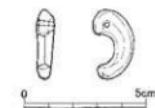
第27図 第1号墳出
土鐵器実測図 (1/2)



第28図 2号土壙墓出土鐵器実測図 (1/2)

石製品(図版11、第29図)

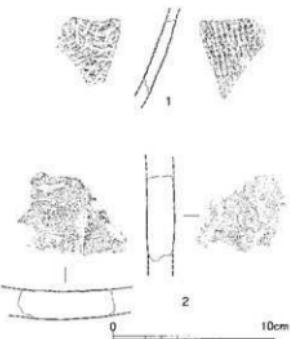
第5号墳1号主体部中から出土した滑石製勾玉である。長さ2.84cm、厚みは0.59~0.73cmを測る。頭部に一方向から穿孔が施される。淡緑灰色を呈する。



第29図 第5号墳1号主
体部出土勾玉実測図 (1/2)

3. その他の遺物(図版11、第30図)

2点とも第1号墳の表土剥ぎ段階で出土した。1は、須恵器壺類の体部破片資料。外面は擬格子叩き、内面は同心円状叩きが観察される。焼成は頗る良好で、暗青灰色を呈する。2は、平瓦の小破片資料。厚みは1.7cm前後を測る。凸面は丁寧なナデ仕上げを施す。凹面は目の細かい布目が観察される。胎土に最大4mm大の白色砂粒を少量含む。焼成はややあく軟質で、白灰ないし淡灰色を呈する。



第30図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

VI まとめ

今回のウトグチA遺跡の発掘調査では、古墳群、土塙墓、土塙等の遺構が検出され、前項までにそれについて述べてきたが、とくに古墳群について若干であるが発掘調査の成果をまとめておきたい。

ウトグチA遺跡で確認された古墳群は、ウトグチ古墳群の一支群とみなされるが、今回の調査範囲で7基が確認された。古墳群は、那珂川及びその支流の概原川の東岸中位段丘の背後に派生する標高52~56mの小丘陵尾根上に立地しており、墳墓の構築に当たって眺望性に優れる選地であったことが窺える。今回の調査地点の北側に対峙する小丘陵上のウトグチC遺跡でもほぼ同規模の方墳が4基調査され、さらに、その北側の小丘陵上のウトグチB遺跡においても円墳1基が確認されており、三つの支群は、立地性においてほぼ同様であるとみなされる。

墳丘の規模及び構築については、尾根上最も高所に立地する第1号墳が円墳で直径約16mと一回り大きな規模であるのに対して、他の6基は方墳で一辺が7~12mの規模におさまる。周溝については、第1号墳と第2・3号墳、第4号墳と第6号墳のそれぞれの間で一部共有している。なお、第2号墳と第6号墳との間は、尾根線に平行する地山整形の痕跡が若干あったと考えられる向きもあり、もう1基方墳があった可能性も考えられるが、主体部等を確認していないので何ともいえない。また、尾根上全体に後世の土砂流出や擾乱の多いこともあって、わかりにくい点もあるが、尾根上の切断掘削による周溝の形成をはじめとした地山整形による墳丘の造り出しとその上位に若干の盛土整形によって墳丘が構築されている。なお、山陽新幹線博多総合車両基地の建設計画時に県教育委員会を主体とした古墳群周辺での分布調査によって前方後方墳としていたものは、今回の同地点での発掘調査による第1及び2号墳に相当する。

主体部については、古墳群全体として墳丘部分の残り具合が決してよくないが、粘土郴割竹形木棺、石棺系小竪穴式石室等が採用されている。第1号墳主体部の粘土郴割竹形木棺は、他を圧倒する規模と内容であると考えられる。第2号墳の主体部は、床面の礫敷きしか残っていないが、木棺であろうと考えられる。そのほかの古墳の主体部についても、第6号墳以外は木棺であろうか。なお、前項において、石蓋土壙墓は弥生時代のところで扱ったが、第5号墳にともなう副次的な主体部かもしれないが確証はない。

古墳群の時期については、各主体部からの玉類、鉄器等の副葬品の出土量が極めて少ないが、第1号墳周溝中から古式土師器の小型丸底壺・甌の破片がわずかに出土しており、出土土器から第1号墳は4世紀後半頃の築造と考えられる。

以上から総合的に推察すると、ウトグチA遺跡の古墳群は、第1号墳が最も古く、略東西方向に延びる丘陵尾根上を次第に東側に奥まりながら4世紀後半代に墳墓が構築されたと考えられる。

図 版



1 発掘調査前全景（北から）

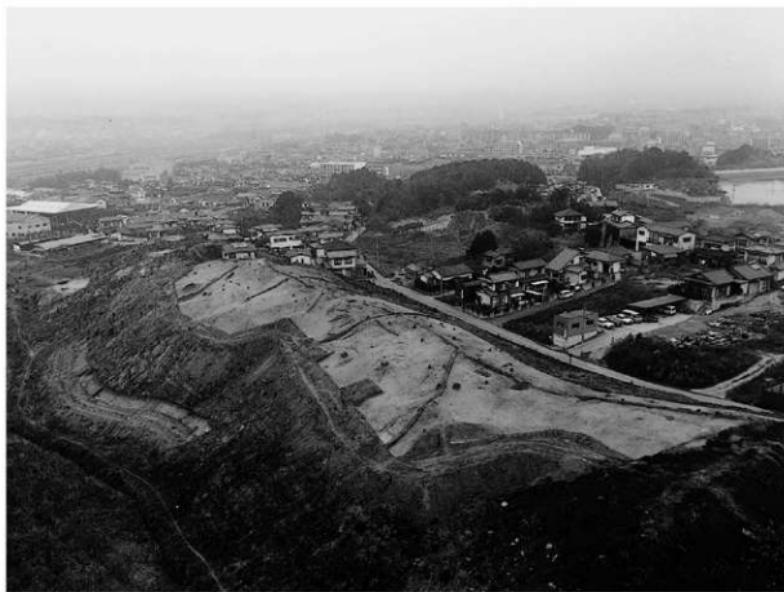


2 発掘調査前全景（南東から）

図版2



1 調査後全景（真上から）



2 調査後全景（南から）

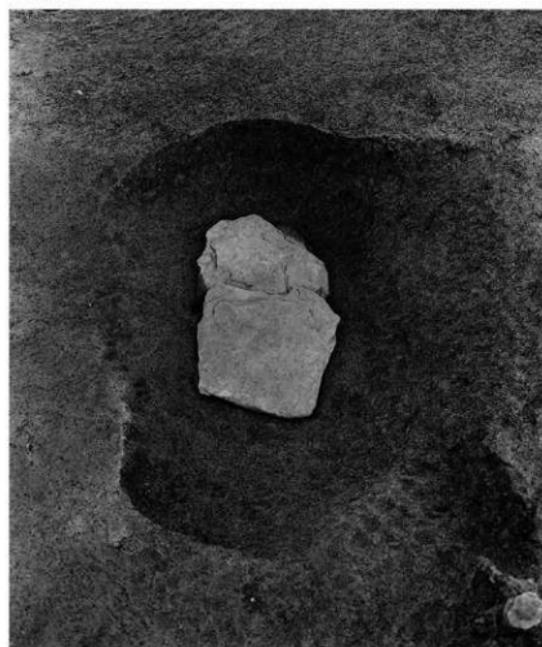


1 調査後全景（南西から）



2 1号土壤（北から）

図版4



1 石蓋土壙墓（西から）



2 第1号墳全景（真上から）



1 第1号墳主体部
(南西から)



2 第1号墳主体部
(北西から)

図版6



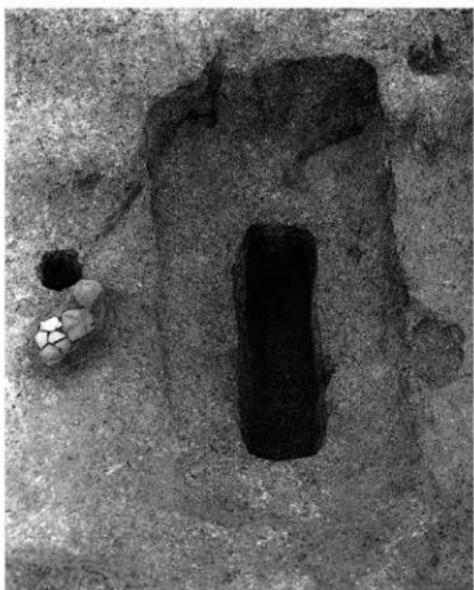
1 1・2号土壙墓（北西から）



2 1号土壙墓（北西から）



1 2号土壙墓（北西から）



2 3号土壙墓（南東から）

図版8



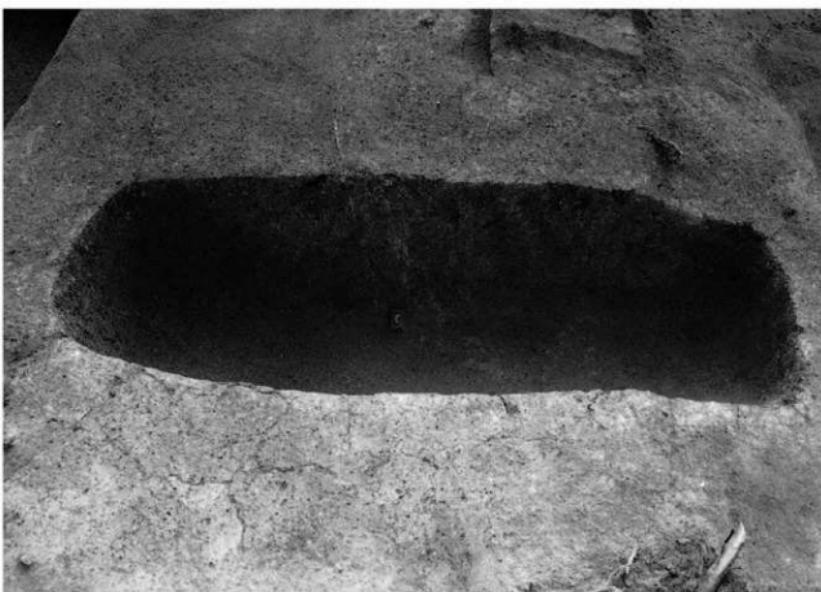
1 第2号墳主体部（南から）



2 第3号墳主体部（南西から）



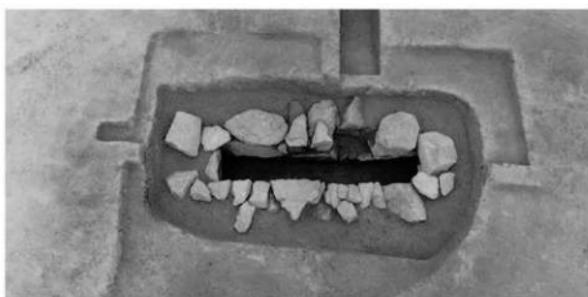
1 第4号墳（西から）



2 第5号墳1号主体部（北から）



1 第6号墳主体部（南から）



2 第6号墳主体部（南から）
(蓋石除去後)



3 第6号墳主体部（蓋石除去後）（東から）



第24図1



第26図



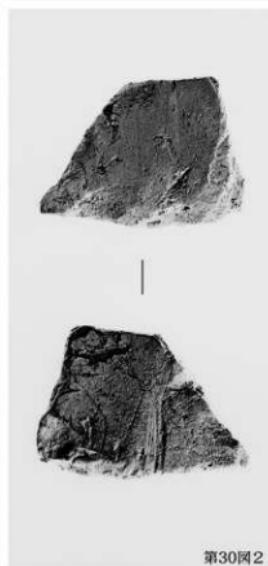
第29図



第24図2



第27図



第30図2



第25図



第28図

出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	うとぐちえーいせき						
書名	ウトグチA遺跡						
副書名	福岡県春日市白水ヶ丘所在遺跡の調査						
卷次							
シリーズ名	春日市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第48集						
編著者名	丸山康晴						
編集機関	春日市教育委員会						
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111						
発行年月日	2007年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ウトグチ A遺跡	福岡県 春日市白水ヶ丘 2丁目54番地外	40218	33°30'30"	130°26'45"	1986.9.17 ～ 1987.3.31	4,600	上白水南土地 区画整理事業 に伴う緊急発 掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
ウトグチA遺跡	墳墓	弥生 古墳	土壇 1基 円墳 1基 方墳 6基	弥生土器 鉄製刀子 石製勾玉 土師器			

ウトグチ A 遺跡

春日市文化財調査報告書
第 48 集

平成19年3月31日

発 行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印 刷 株式会社 三 光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1